

March 2024 Vol. **151**

IIBC NEWSLETTER

2024年3月発行

ロヒット・シャルマさん



大井 真理子さん



[Special Feature]

対談

グローバル社会の 第一線で活躍するために 必要な英語力とは



女子美術大学付属
高等学校・中学校



寺内 一さん

永井 聡一郎



[Special Interview]

国際的なビジネス環境で成功するために
必要なスキルを測る
TOEIC® Program

[English in My Life]

完璧な英語でなくても
仕事や生活で支障がなければそれでいい

[English Frontline]

美術と英語の融合で
実践的な発信力を高める「Art English」

IIBC

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
The Institute for International Business Communication

ビジネスコミュニケーションに必要な英語力 その成長の糸口とは

永井 寺内先生をはじめ、関係された皆様のご尽力により、この度、JACETとIIBCの共同研究(2022年調査)の結果が書籍化され、『ビジネスコミュニケーションのための英語力～英語の壁を打ち破ったビジネスパーソンの成長要因～』(朝日出版社)と題して刊行されます。今回の調査研究は、過去2回の大規模調査が前提となっています。

寺内 06年に行った調査では、ビジネスパーソン7,354名から得た回答を基に、日本人が国際交渉を行う上で必要な英語力の全体像を把握しました。そこでは国際交渉に必要な英語力の理想と現実にはギャップが存在することが確認されました。次に13年の調査では、英語による会議にテーマを絞り、会議の中でどのような困難があるのかを、909名の国際業務に携わる管理職に調査しました。そこから見てきたのは、職位や役割などに応じて、直面している困難や求められる英語力に違いがあるということでした。

永井 職位が上がり役割が複雑になるほど、英語力だけではなく、プラスαの要素が重要になってくるということでしたね。ただ、その具体的な内容や成長への解決策というのは次の研究課題として残る形になりました。

寺内 はい。そこで今回は、英語力の言語的要素だけに焦点をあてず、まずはビジネスコミュニケーションの全体像を捉え、その上で求められる英語力とは何なのかを多角的に分析することにしました。そうすることで、英語の壁を突破し成長していくための解決策を提示し、具体的な行動を起こしていくきっかけとなるものにしたいと考えました。

永井 この10年、20年を振り返ると、英語のニーズは企業の中でも様々な部署に広がり、職場には外国人の方が増え、リモート会議で海外とつながるのも当たり前になってきました。そうした時代の変化も、今回の研究に反映されていると思います。

第一線のビジネスパーソンたちは 英語の壁をどう乗り越えてきたか

寺内 本書で英語力の指標として用いたCEFR(セファール)は、外国語の習熟度や運用能力を示す国際標準指標です。基礎段階のAレベルから一番上の熟達度のCレベルまであり、ビジネスパーソンについてはB1とB2の間の「壁」が大きい。この壁の突破こそがビジネスコミュニケーションに必要な英語力のブレークスルーとも言えます。B1とB2の違いを端的に言うと、B1は自分の言いたいことが言えればいいレベル。一方、「相手」の存在を常に意識した的確なコミュニケーションを図れるのがB2です(図表1参照)。そのため、壁を乗り越えるには従来の英語学習だけでは難しく、英語力の「質的な転換」といったことが求められます。

永井 本書では業務や役割の複雑さに応じて、ジュニア・



一般社団法人大学英語教育学会(JACET)特別顧問/
高千穂大学学長

寺内 一氏

一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会
執行理事

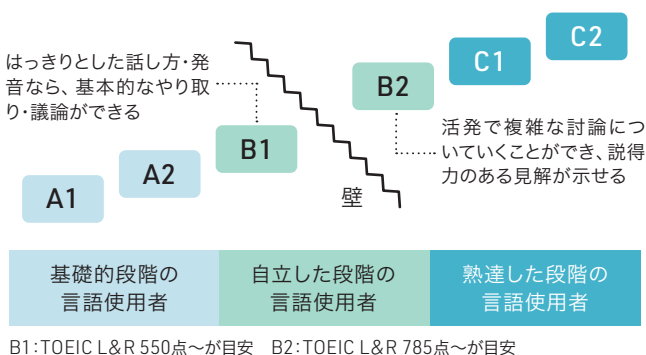
永井 聡一郎

特集 対談 グローバル社会の 第一線で活躍するために 必要な英語力とは

AIツールなどの登場により、ビジネスや英語学習の環境が15年以上向上していないのはなぜなのか――。そのような素朴なIIBCが共同で調査研究(「2022年調査」)を実施しました。本特集本調査研究を統括するJACET 特別顧問/高千穂大学学長のグローバル社会の第一線で活躍するために必要な英語力や、

大きく変化する中、ビジネスパーソンが実感する英語力が、疑問に端を発し、一般社団法人大学英語教育学会(JACET)とでは、調査研究に参画したIIBC執行理事の永井聡一郎が、寺内一氏をお迎えし、今回の結果から導きだされた、習得のためのポイントなどについて語り合いました。

図表1 CEFR B1からB2に達するとき
越えなければいけない壁



シニア・エグゼクティブという区分が示されていますよね。初歩的業務を担うジュニアであれば、一方的な要求事項の伝達や定型的なやり取りがこなせるB1レベルでいいのですが、シニア以上になるとファシリテーターとして会議をまとめたり、誰かと議論や交渉をしたりしなければなりません。そのためには「相手」の興味や関心を読み取って、それに応じて話を組み立てていくB2レベルの英語力が必要になってきます。実際、私自身もそこまでいくのは非常に大変でした。

寺内 今回は永井さんにも、ご自身で壁を乗り越えた1人としてインタビュー調査に答えていただきましたね。

永井 私個人の話をすると、当初、英語は得意な方ではなかったのですが、初めての海外出張では最低限、自分が伝えるべきことだけ伝えようと原稿を暗記していきました。ところが現地では、そもそも相手が何を言っているのか全く理解できなかったのです。何かを伝えるためには、まず相手の言うことを正確に理解するのが大事なのだと思い知りました。

そこで、自分のビジネスフィールドであるテスト業界でよく使われる単語や言い回しを集中的に学習したところ、だんだん相手の話の内容が理解できるようになりました。さらに何度も会って、相手が何に関心を持ち、何を重視しているのかを知ると、それに応じて何をどう伝えればいいのかが分かってくる。そういったことを苦労しながら体感として徐々に学んでいった感じです。

寺内 そのように第一線のビジネスパーソンたちは、個々に大変な努力をしてB1からB2への壁を乗り越えているわけです。しかしそれは暗黙知であり、ほかの人は知ることができませんでした。実は今回の調査研究の最終ゴールはそうしたノウハウなり要点を蓄積して体系化し、これから壁を越えようとする一人ひとりに、その人に合った最適な学習方法を提示できる言語学習プラットフォームを作り上げることなのです。

永井 それが実現すればこの調査研究は、学習して学んだことと実際のビジネスの現場で求められる力の懸け橋になると思います。英語を学習していく中でリアルにつまずくポイントや、それをどうやって乗り越えていくかというエッセンスを目に見える形にすることで、より実践に直結した英語学習ができるのではないのでしょうか。

「ジャンル」を 意識することが重要

寺内 コミュニケーションには必ず、目的(Purpose)、相手(Audience)、内容(Information)があって、それによって形式・伝え方(Language feature)が変わります(図表2参照)。これらの頭文字をとった「PAIL」を常に念頭に置くことが大事です。例えば商談相手に、「ねえ、この製品買っ

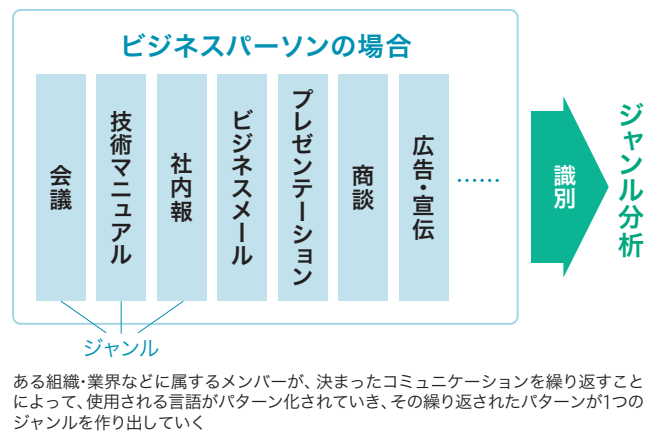
図表2 常に念頭に置いておくことが
重要な「PAIL」

Purpose	何を目的として
Audience	誰を情報の受け手(聞き手・読み手)として
Information	どのような内容を
Language feature	どのような形式・伝え方で

てくれる?」などとは言いませんよね。目的や相手、内容によって言葉の形式や伝え方が違うのは、日本語でも英語でも同じです。ところが英語教育ではそういうことをあまり教えていません。B1とB2の壁も、実はこの意識の差が非常に大きいのです。

その前段階として知っておくべきなのが、「ジャンル」という概念です。ライティングと言っても手紙と日記は違いますし、社内報と契約書も異なります。同じスピーキングでも商品プレゼンとパーティーでのスピーチでは目的や相手が違うので、求められる言語の形式や伝え方は全く異なります。これが「ジャンル」です(図表3参照)。そして、それぞれの「ジャンル」には決まったスタイルやパターンが存在します。そういうコミュニケーションのルールみたいなものを本当は中等教育から教えるべきなのです。

図表3 「ジャンル」の概念の例



永井 「ジャンル」を意識することによって、より容易に内容を理解したり、適切な表現を使ったりできるのですね。

寺内 その点で、私が注目しているのがTOEIC Programです。TOEIC Programの問題は、例えばドキュメント自体が何かの「ジャンル」になっているものが多い。ビジネスメールや注文書だったり、レストランのメニューや豪華クルーズの案内パンフレットだったりして、その内容や形式も非常にリアルに作られています。TOEIC Programを、ただ点数を取るためのテストではなく、「ジャンル」という視点で捉えなおして、「この読解問題はどんな目的で、誰に向けて、何を一番言いたいのか」といったことを意識するだけでも、自分の英語力のブレークスルーを図ることができるのではないのでしょうか。

永井 ありがとうございます。大学の先生方からは、例えばホテルのチェックイン場面を経験したことがない学生さんにとっては、TOEIC Programの問題がそのシチュエーションを疑似体験できる機会になっているという話を

よく聞きます。先日もある金融機関の方が、「実際の業務で扱ったビジネス文書が、TOEIC Programの問題で見た内容にそっくりだったのでスムーズに理解できた」とおっしゃっていました。

寺内 例えばTOEIC L&Rのリスニング問題で、飛行機の機長の機内アナウンスがありますよね。機長のアナウンスのパターンは決まっているので、TOEIC L&Rの受験に向けた学習を通して、そのパターンが頭に入っていれば、実際の海外出張時に、「この飛行機が何便で、どこの空港に向かっているのか」くらいは聞き取ることができるわけです。そういった意味で「ジャンル」を知って意識することは、ビジネスの現場でも役立つと思います。

AIが進化しても英語力は必要

永井 また近年、AIツールと英語力の関係についてもよく話題になります。実際、既に多くの企業やビジネスパーソンが機械翻訳を業務に取り入れて活用しています。私は、AIは上手に利用していけばいいと思っています。一方で、内容のファクトチェックや、コミュニケーションの目的・相手に合わせた表現になっているかなどの確認は今後も人が行う必要があると考えています。そして、そのためには一定の英語力が必要です。

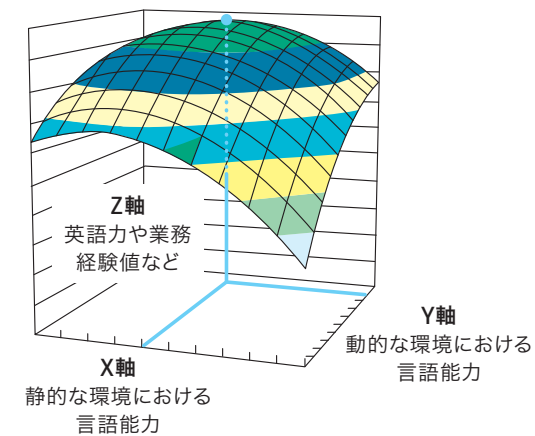
寺内 AIを否定するのではなく、うまく取り入れながらやっていくのが現実的な方向性ですね。特に機械翻訳の精度は非常に上がってきています。学生が英語で論文を書く際、機械翻訳の使用を認めている研究室も増えていて、その際には翻訳ができるだけ正確になるよう事前に日本語を並べ替えたり、異なる翻訳ソフトにかけ両者の結果を比較するといった工夫をさせていて、学生たちが機械翻訳と上手に向き合う方法を身につけるプロセスにもなっています。

永井 ただし、現状の技術進化を前提にしたとき、ビジネスコミュニケーションにおけるAIの活用には難しい面もあると感じます。ビジネスは競争です。例えば会議で色々な国の人たちが英語で侃々諤々と話をしている中で、日本人だけが機械翻訳を通すことでワンテンポ遅れて参加していたら、絶対に競争には勝てない気がします。

寺内 コミュニケーションには、準備に時間をかけられる静的なもの、瞬時に反応しなければいけない動的なものがあります。その点では、少なくとも現時点での機械翻訳や生成AIの技術力では、丁々発止の議論や交渉といった動的コミュニケーションへの対応は難しいかもしれません。これは、ビジネスパーソンの成長段階にも関わる話です。初歩的な業務を担うジュニアであれば、メールなどの静的なやり取りが多く、その内容もシンプルかつ明確なので、機械翻訳を使うことで英語力の不足をカバーできるかもしれません。しかし、シニアやエグゼクティブになると、会議の交渉や会食での信頼関係構築など、動的コミュニケーションの頻度が

図表4

言語学習プラットフォームモデル案



高まります。内容も複雑で抽象的な適応課題が中心となるため、AIツールだけでは解決できないことが格段に増えると思います。ですので、ジュニアの時点で、ツールに依存し英語力の向上を止めてしまうことは、その後の大きなリスクをはらんでいると言えるでしょう。

永井 AIが進化しても、英語力を身につけることは不可欠だということです。

ビジネスを成就するために必要な英語とは

寺内 今の話にも関連しますが、今回の調査研究の結果を基に、私は新たな成長モデルをベースとした「言語学習プラットフォーム」の構築を考えています(図表4参照)。仮にそのモデルを三次元とすれば、X軸に「静的な環境における言語能力」、Y軸に「動的な環境における言語能力」、Z軸には「英語力や業務経験値など」を取り、そこに今回ヒアリング

した結果を踏まえ、ビジネスパーソンたちが壁を乗り越えた方法やポイントなどをマッピングします。さらに今後、他の専門分野の方々にも協力してもらって自己診断用の質問項目を作成する計画です。学習者がその質問に答えてデータを入力すると、ビジネスコミュニケーションに必要な英語力について、その成長過程における自分の立ち位置が分かり、次に行うべき最適かつ具体的な学習の内容や方法が提示されるような仕組み作りを目指しています。世の中には無数の英語教材がありますが、それらもこのプラットフォームに落とし込めば、学習者の状況に応じて最適な教材を提供できるようになるはず。これを実現するためには、教育界、産業界といった垣根を越え、あるいはアジアなどの諸外国とも連携しながら、さらに広く深く研究を進めていくことが肝要でしょう。

今回の調査研究で印象的だったのは、インタビューした方たちが、皆さん「重要なのは英語の正しさではなくビジネスの目的を果たせるかどうか」と言っていたことです。ビジネスの場面では、文法的に正確な英語を話せるだけでは不十分。ビジネスを成就することを第一の目的にしたとき、本当に必要な英語力を身につけるためのお手伝いができればいいと思います。

永井 本書は、国際的な業務に携わるビジネスパーソンがどのように自身の英語の壁を乗り越えてきたのか、その成長要因を、産学連携の調査研究を通して可視化した、日本で初めての書籍となります。この貴重な知見が、IIBCの基本理念でもある「人と企業の国際化」の推進につながることを心から願っています。



2022年調査の概要

2022年調査

調査目的	テクノロジーの進化などによるビジネス環境の変化を踏まえながら、ビジネスにおける英語コミュニケーション上の問題点と国際的な業務に携わるビジネスパーソンとしての成長要因を解明する
調査対象	国際的な業務に携わり業務で英語を使用している方2,686名(アンケート調査)
調査方法	アンケート(オンライン)、インタビュー(対面)
主な調査結果	● ビジネスパーソンの成長段階に応じた業務・役割に根差した英語力の習得が必要 ● 壁の突破には相手を常に意識した英語力が必要 ● それを習得する「場」として「言語学習プラットフォーム」の構築が今後の課題

「2022年調査」の結果が書籍化されました



この度、JACETとIIBCの共同研究として実施した「2022年調査」が書籍としてまとめられ、『ビジネスコミュニケーションのための英語力～英語の壁を打ち破ったビジネスパーソンの成長要因～』と題し、2024年3月15日に朝日出版社から発行されます。ビジネスの第一線で活躍していくために必要な英語力や、習得のためのポイントなどが掲載されていますので、是非ご覧ください。

『ビジネスコミュニケーションのための英語力～英語の壁を打ち破ったビジネスパーソンの成長要因～』(朝日出版社)
監修:内藤永・寺内一／編集:山中司・石川希美・マスワナ紗矢子／著者:一般社団法人大学英語教育学会産学連携事業成果出版特別委員会、一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会／2024年3月15日発行

完璧な英語でなくても 仕事や生活で支障がなければ それでいい

BBCキャスター・リポーター 大井 真理子さん Profile

おおい まりこ 1981年東京都生まれ。高校2年生のときオーストラリアに留学。帰国後、慶應義塾大学環境情報学部に入學。1学年修了時にジャーナリズム修学のため、オーストラリアのロイヤルメルボルン工科大学(RMIT大学)ジャーナリズム学部に入學。在学中にオーストラリアの放送局でインターンとして勤務。2004年に3か月間渡米。05年、ブルームバーグ東京支局に入社し、経済報道を手掛ける。06年12月に英国放送協会シンガポール支局に入局し現在に至る。

英国放送協会(以下、BBC)で日本人初のキャスター・リポーターとなり、現在シンガポールに在住し活躍されている大井真理子さん。今でこそ、世界中に英語でニュースを伝える仕事をされていますが、高校2年生のときオーストラリアに留学した際、授業の内容が全く理解できず、そこから猛勉強して、現在の英語力を身につけられたそうです。

同じ教材の日本語版と英語版の読み比べが 留学先での英語力向上につながる

BBCでキャスター・リポーターをしているという、子どもの頃から英語が堪能だったと思われるのですが、そんなことはありません。3歳まで父の仕事の都合でイギリスにいましたが、帰国後は学校の授業以外英語をほとんど勉強してい



ロイヤルメルボルン工科大学に留学していたときの大井真理子さん

ませんでした。

本気で勉強し始めたのは、高校2年生のとき、オーストラリアに留学してからです。父の転勤先のベトナムにはインターナショナルスクール(高校)が少なく、海外ドラマみたいな生活ができそう、といった軽い感覚で、知人のツテがあるオーストラリアに留学することを決めてしまいました。

ところが、現地でホストファミリーと話すと、自分の英語力の低さにがく然としました。現地の語学学校で2か月勉強してから高校に入校したのですが、授業を受けても何を言っているのかさっぱり分からない。友達もできず、行ってみたいパーティがあっても呼ばれない……といった日々でした。

しかし日本で盛大な送別会をしてもらった以上、逃げ帰るわけにはいきません。現地の教材を読んでも分からないので、日本から本を取り寄せ、その日本語版と英語版を読み比べました。毎晩、夜中の2～3時頃まで勉強しましたね。

するとその効果が出て、1年後には英語の授業が少しずつ聞き取れるようになったのです。また友人ができ、パーティやキャンプなどに行くようになると、リスニングやスピーキ

ングが上達しました。さらに、IB(国際バカロレア)の試験を受けるために、英語でエッセイを書く訓練をしたことがライティングの上達に役立ちました。

自分のスキルが一番活かせる場を探し 海外への道を切り開く

メディアの仕事を目指したのは、飢餓に苦しむ子どもたちを取り上げたBBCのドキュメンタリー番組を、ホームステイ先で見たことがきっかけでした。それから「将来は世の中の問題を映像で発信するジャーナリストになりたい」という思いを抱くようになり、ロイヤルメルボルン工科大学に進学してジャーナリズムを学びました。

しかし、いざ就職しようと思っても、英語が第2言語で労働ビザのない日本人を、ビザを取得してまで雇おうという現地メディアはありませんでした。大学院に進み、そのコースの一環で地元の小さなテレビ局でリポーターの仕事をして、そこからメディア関係者たちに、「働かせてほしい」と手当たり次第に連絡しましたが、採用に至りませんでした。卒業後3か月間、アメリカ・ニューヨークに渡り仕事を探しましたが、それでも就職先は見つかりませんでした。

そのようなとき、普段は無口な父からこんなアドバイスを受けたのです。「自分のスキルが一番活かせる場所はどこなのか考えなさい」と。日本語と英語が少し話せ、テレビのリポーターができ、原稿も書ける。海外では難しくても、日本ならチャンスがあるのではないか、というのです。

しぶしぶ日本に帰国すると、すぐに反応がありました。アメリカ金融情報サービス大手のブルームバーグ東京支局で、仕事をさせてもらえることになったのです。担当は経済ニュース。当初は日本銀行とメガバンクの違いが分からないレベルでしたが、「ビジネス・経済の分野はなり手が少なく、次のキャリアにつながりやすい」と、ニューヨークで助言されたことを思い出し挑戦しました。するとそれが功を奏し、約2年にわたり多くの企業のCEOやエコノミストを取材した経験が買われ、BBCからオファーをいただいたのです。

文法が完璧な人が リポーターに適しているわけではない

BBCに入社する頃になると英語は充分上達していましたが、ネイティブスピーカーに対する劣等感は常に消えませんでした。例えば、ネイティブスピーカーのリポーターが書いた記事原稿は、英語の表現が秀逸だけでなく、シェークスピアのような名作が巧みに引用されているなど、英語が第2



日本から世界に向けレポートする大井さん

言語の私には考えつかないような内容になっていたのです。

しかし、BBCで何年かリポーターをしてからは、「どうがんばってもネイティブスピーカーにはなれない。できないことで悩むより、自分しかできないことを追求した方がいいのでは」と考えるようになりました。

すると自分の強みが見えてきて、「私はネイティブスピーカーの特派員とは異なり日本語が話せる。日本では誰にでも取材ができてリアルな声を聞くことが可能で、テレビのワイドショーやタブロイド紙などからも情報を得られる。そんな私だからできる報道をすればいい」と気づきました。

発音やアクセントも、ネイティブスピーカーのようにする必要はないと思うようにもなりました。英語を母語にしている、各地にはなまりがあります。例えば、ロンドンとスコットランドでは同じ英語でも言葉が違うと思うほどで、スコットランドの記者と初めて中継したときは、何を言っているのか聞き取れないぐらいでした。

BBCのニュースを見ている、今はマルチリンガルのリポーターが多く、英語が第2言語どころか、第3、第4言語という人もいます。そういう人はアクセントだけでなく文法も間違っていることがあります。文法が完璧な人がリポーターに適しているかというそうではないと思います。例えば、地域紛争などのことであれば、少しブロークンな英語でも、現地にいて内情に詳しいリポーターに伝えてもらう方が、よりリアリティがある内容を届けられることができるのです。

日本の学校で講演すると、「どうすれば英語を完璧に話せるようになりますか」とよく聞かれますが、「完璧な英語」を話せなくても、自分の生活や仕事上で支障がないところまで持っていければそれでいいのではないか、と思っています。

完璧ではなくても、英語でのコミュニケーションができるようになれば、人生のやりたいことを広げていくことが可能です。皆さんにも是非その醍醐味を味わっていただきたいと思っています。

国際的なビジネス環境で成功するために必要なスキルを測る

TOEIC Program

近年の絶え間なく変化するビジネス環境では、世界規模で直面している多くの課題を解決するための準備を、個人レベルで行っておく必要があります。最善の準備をするにはどうすればいいのか――。

TOEIC Programを開発したETSで、Global Higher Education & Workskills担当のシニアバイスプレジデントを務め、これまで25を超える国・地域で様々な職務を経験し、プロフェッショナルとしての実績をお持ちの Rohit Sharma (ロヒット・シャルマ) 氏にインタビューしました。

加速する変化に対応するために不可欠な リスニングによる英語力の向上

近年のビジネス環境では、世界規模で大きな変化と変革が起きており、そのスピードは加速しています。これらに対応するには、世界だけでなく、日本においても課題に取り組む準備が不可欠で、成功するためのスキルが必要です。その1つが、世界中でビジネスの主要言語となっている英語であり、英語を習得することが、新たなチャンスを得る可能性を、広げていくと言えるのではないのでしょうか。

例えば近年、世界的な貿易摩擦や新型コロナウイルス感染症のパンデミックといった要因を背景に、米国企業が輸入品の調達先を、中国からメキシコに移したことを考えてみましょう。これは、生産拠点を消費地の近くに移転する「ニアショアリング」と呼ばれるもので、メキシコは米国に近く、人件費が比較的低いという影響から恩恵を受けていると言われています。さらに私は、メキシコがビジネスチャンスをつかむことができたのは、自国がそのような恩恵を受ける前

に、多くの人がリスニングを通じて英語力を高めていたからだと思っています。

現在の日本に目を向けると、観光産業は非常に有利な状況にあり、同様に大きなビジネスチャンスをつかむ可能性があると考えています。日本の豊かな文化と自然の美しさは、今後も多くの外国人観光客を魅了し続ける、素晴らしい財産

です。

一方で、日本は少子高齢化に直面しています。観光産業をはじめ様々な産業における強みを活かしながら、こうした課題に対応していくために、日本は英語力の向上をより強化すべきだと思っています。それには英語力を備えた外国人労働者の雇用や、日本人の英語力向上の促進といった2つの方法が考えられます。どちらの場合も、世界160か国・14,000以上の組織で使用され、世界的に認められた評価ツールであるTOEIC Programは、英語力の評価基準として役立ち、また同僚や海外の顧客など、国境や文化をこえた職場での効果的なコミュニケーションに必要な英語力を測ります。ボーダーレス社会の影響を考えると、英語力の向上が、国内外の課題解決に貢献するために互いに関わり、共感を示し、効果的に協力できる、真のグローバル市民を育成することへとつながっていくのではないのでしょうか。

人材マネジメントにも有効な TOEIC Program

一方、人材を投資対象となる資本と捉え、企業価値の向上を図るヒューマンキャピタルマネジメントが、現在日本でも注目を集めています。この考え方は、グローバルなビジネス環境において重視されており、株主への情報開示の要求が高まっています。人的資本への投資という観点からすると、海外進出の有無にかかわらず、従業員の英語力の向上は、今後の日本企業にとって非常に重要な取り組みの1つになると思います。この点においても、TOEIC Programは従業員一人ひとりの能力向上のツールになるとともに、世界共通のスコアとして示されるため、情報開示にも有効に貢献します。

ETSはTOEIC Programなどを通じて、日本と世界の英語力の向上をサポートし続けます。さらに、私たちは、チームワークや問題解決能力など、世界中の経済発展に貢献できる、より持続的な「非認知」スキルについて見識を備えた評価に関しても今後注力してまいります。



ETS Global Higher Education & Workskills
担当シニアバイスプレジデント
Rohit Sharma (ロヒット・シャルマ) 氏

遊びを持たせたアウトプット型学習

様々な立体芸術や絵画作品が校内を彩る女子美術大学付属高等学校・中学校では、「日本で唯一の美術大学付属校」という特色ならではの英語教育が行われています。それが、2019年度よりスタートしたオリジナル科目「Art English」です。美術と英語を融合したこの授業は、通常の英語授業と並行する形で週1コマ、中高6年間にわたって展開されます。



女子美術大学付属高等学校・
中学校 英語科教諭
黒川 路子氏

そのコンセプトについて、英語科教諭の黒川路子氏は、「美術やアートは、世界中でメッセージ性を持ち得る媒体です。それを世界の共通語である英語で発信できれば、将来の活躍の幅も広がってくるというのが、根幹にあります」と語ります。

発信力の向上に軸足を置く「Art English」。その最終的な

ゴールは、高校3年で行う卒業制作について、作品の魅力やこだわりを英語でプレゼンできるようになることです。

英語科と美術科の教員が協働で作成したオリジナル教材も、この目標に向け、アウトプットに重きが置かれています。作成にあたってこだわったのは、「遊びを持たせる」こと。単に英語と美術を組み合わせるのではなく、その上で生徒が楽しんで学べるアクティビティとなるように工夫が凝らされています。

例えば中学では、お互いがアニメのキャラクターになりきって、相手の名前や趣味を尋ねる表現を学びます。また文法学習では、「不定詞表現を使って4コマ漫画を作る」といったユニークな授業も行われています。

「生徒たちは漫画を描くのが大好きなので、毎回締め切りに追われた作家のように、アイデアを絞り出しています。彼女たちが好きなことと絡めているので、同じ英語であっても苦手意識が芽生えづらいのかなというのは、見ていて感じるところです」

さらに、これらアウトプット型の学習と併せて、中学1年の段階から美術用語の知識を蓄積し、言語化が難しいアート領域について語れるようになるための土台を築いていきます。

English Frontline

各分野での英語に関する取り組みをご紹介します

美術と英語の融合で 実践的な発信力を高める「Art English」

熱量があるから発信したい欲求が上回る

高校に上がると最終的な目標に向け、美術知識の専門性に加え、アウトプットの比重もより一層高まります。

ある芸術家の作品について、色・形・線・質感などの英単語を駆使して説明する授業が行われるのが1年生。2年生では、自作のゲーム・おもちゃについて英語でプレゼンする授業が設けられています。生徒は企業の開発担当者さながらに、対象年齢や遊び方などをプレゼン。授業の最後には、自分がやりたいと思ったゲーム・おもちゃにみんなで投票し合うことで、モチベーションアップにつなげています。

生徒の反応について黒川氏は、「毎年こちらが驚かされる」と言います。

「1年目に担当した高校1年生は、『英語でお芝居をしましょう』とだけお題を振ったら、モネやセザンヌといった自分が演じる役の人形を作ってきました。『え、1週間もなかったけど……』とびっくりさせられて。ほかにも、ゲームのプレゼンのときには自分でアプリを作ってきた生徒もいたりして、毎年思いがけないものが返ってきます」

予想以上の意欲的な姿勢には、次の理由があると語ります。

「彼女たちは絵を描くことや作品を作ることに對して、すごく熱量がある。そこに英語という条件を1つ課したとしても、その負荷より、自分の好きなことを発信したい・表現したい欲求が上回るのかなと。そう感じています」

遊び心と活気にあふれる「Art English」は、英語科と美術科がアイデアを出し合い、毎年アップデートを続けています。



英語での劇に向け、高校1年生の生徒が紙粘土で作った人形。左からセザンヌ、ドガ、モネ、ルノワール

TOPIC
01

第15回 IIBC高校生英語エッセイコンテスト表彰式を開催 グローバルな活躍が期待される高校生を応援



表彰式に出席された8名の皆さん

IIBCが毎年開催している、高校生を対象とした「IIBC高校生英語エッセイコンテスト」は今年で15回目を迎えました。昨年と同様に「身近な異文化体験～コミュニケーションを通じた響きあい～」をテーマとした英語のエッセイを募集し、本選に153校・230作品、奨励賞には43校・2,443作品と多数の応募をいただきました。

本選応募の230作品の中から受賞作品を決定し、2023年11月11日(土)ホテルニューオータニ(東京都千代田区)にて、受賞者の9名を表彰しました。当日は、受賞者、保護者の皆様、

ご指導いただいた先生、過去の受賞者、審査員に参加いただいたほか、会場に来られなかった方には、オンラインで参加・視聴いただきました。

当コンテストの狙いは、グローバル化が急速に進展する社会において、異なる文化を持つ人々と関わり合う大切さを見つめ・考える機会や、自分の考えを英語で表現する能力を養う場を提供することです。これからもコンテストを通じて、将来グローバルに活躍することが期待される高校生の皆さんを応援してまいります。

受賞者

👑 最優秀賞

田 哲さん
芦屋学園高等学校 2年
タイトル: A Global Catalyst

👑 優秀賞

武藤 慶之介さん
渋谷教育学園幕張高等学校 2年
タイトル: A World of Generosity

和氣 菜々子さん
早稲田渋谷シンガポール校 2年
タイトル: The Importance of Learning History
※優秀賞が同位で2名のため、優良賞はなし

👑 特別賞

四方 美優さん
東京学芸大学附属国際中等教育学校 5年
タイトル: Overcoming stereotypes

👑 高坂 真琴さん

頌栄女子学院高等学校 1年
タイトル: Eyes or Mouths

👑 田島 帆奈さん

渋谷教育学園幕張高等学校 3年
タイトル: From Blue and Red to Purple: Embracing Bicultural Identity and Diversity

👑 鶴野 結子さん

UWC ISAK Japan 2年
タイトル: Exploring Language: Bridges of Empathy and Human Unity

👑 若山 舞衣さん

名城大学附属高等学校 1年
タイトル: Imagine

👑 日米協会会長賞

👑 四方 美優さん

東京学芸大学附属国際中等教育学校 5年
※特別賞とダブル受賞

👑 田 哲さん

芦屋学園高等学校 2年
※最優秀賞とダブル受賞

👑 武藤 慶之介さん

渋谷教育学園幕張高等学校 2年
※優秀賞とダブル受賞

👑 アルムナイ特別賞

👑 深尾 あむさん

クラーク記念国際高等学校 3年
タイトル: Diversity to be aired for an Equal Future

👑 奨励賞

43校、2,443名

■本選: 1校2作品までの応募が可能。受賞9作品を決定 ■奨励賞: 1校20作品以上の応募校に贈られる賞 ■日米協会会長賞: 本選応募作品の中から、一般社団法人 日米協会が国際理解や国際交流の観点で選出し、優れた3作品へ贈られる賞 ■アルムナイ特別賞: 過去の受賞者(アルムナイ)が本選応募作品の中から選出し、1作品へ贈られる賞
※受賞時の学年を記載

本選受賞作品、および奨励賞に参加された学校は、IIBC公式サイト (https://www.iibc-global.org/iibc/activity/essay/2023_result.html) でご覧いただけます。



最優秀賞を受賞した芦屋学園高等学校2年の田哲さん(写真上)は、学校のプロジェクトの一環として参加したカナダ留学の際に、多文化主義と言われる地で経験した「国境なきコミュニケーション」について、留学前まで抱えていた自身のバックグラウンドに対する思いを執筆され、昨年の特別賞に続く2年連続の受賞となりました。

TOPIC
02

無料でダウンロードできる公式アプリ 「TOEIC公式コンテンツ by IIBC」は毎日更新中!

2022年4月よりサービスを開始している、無料の公式アプリ「TOEIC公式コンテンツ by IIBC」は、テスト受験や英語学習に欠かせない便利な機能がたくさんあり、「今日のフレーズ」は毎日更新されています。ビジネスや日常の様々な場面で使われる英会話に基づいて、フレーズ解説・理解度チェッククイズ・フレーズ集などで構成されている、人気ポッドキャスト「TOEIC presents English Upgrader」の全コンテンツも搭載。この度、新機能としてリスニングモードに音声再生速度調整機能を追加



し、音声再生時の操作性を改善しました。スキマ時間に自分のペースで英語学習を進めたい方やリスニング力を強化したい方におすすめです。さらに、試験日の確認、ご自身の登録内容に基づいたお知らせ情報をチェックすることが可能です。

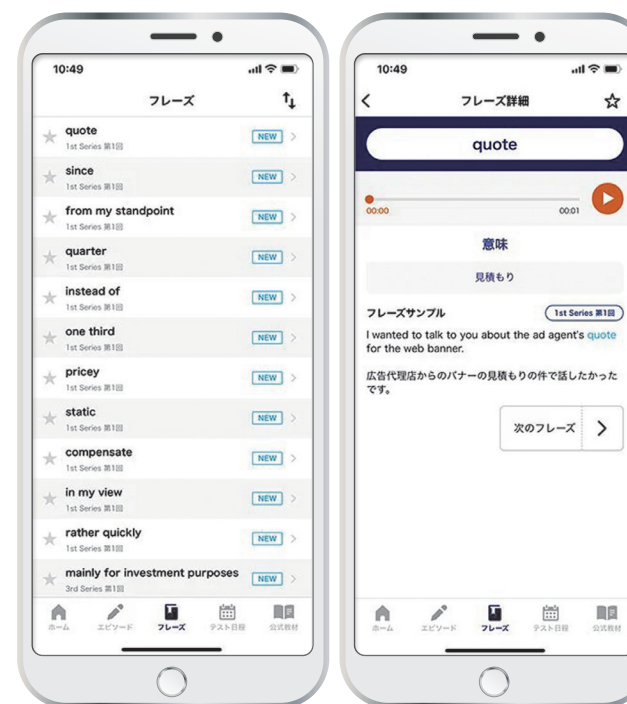
エピソード

エピソードを選んで、リスニングやクイズに挑戦できます。音声はお好みの速度で再生が可能です。



フレーズ

ダウンロードしたエピソードで紹介するフレーズの意味や、フレーズサンプルを確認することで、効率的な学習につなげます。



TOPIC
03

2023年 IIBC AWARD OF EXCELLENCE 基準スコアを取得した538名の受験者を表彰

「IIBC AWARD OF EXCELLENCE」は、コミュニケーションツールとして英語を積極的に使われている皆様を応援したいという思いから2017年よりスタートし、その年に基準のスコアに到達された受験者を表彰する制度です。

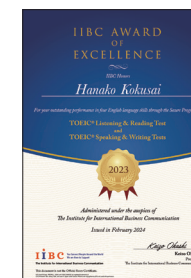
23年には、英語で「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能を測定するTOEIC Testsの公開テストを受験し、4技能をまんべんなく学習された、538名が受賞しました。

受賞者には表彰状などを贈呈。希望者には、SNSでの公開が可能なオープンバッジ(デジタル証明)を発行しています。

■対象のテストと受賞基準

1月～12月にTOEIC Testsの公開テストを受験し、4技能全てにおいて以下の基準を満たすスコアを取得された方が対象です。
※TOEIC申込サイトから申し込まれた方に限ります

- TOEIC L&R(800点以上)
➡リスニング375点以上かつリーディング425点以上
- TOEIC S&W
➡スピーキング160点以上かつライティング170点以上



公平性が高いテスト問題を作成

IIBC 調査研究室

本連載では、TOEIC Programを開発するETSが、テスト品質の維持向上のためにしている取り組みについて、お伝えしていきます。今回も引き続きテストの「公平性」を取り上げたいと思います。

今回はテスト実施後（採点前）に行われる統計学的観点からの「公平性」の検証に焦点を当てましたが、今回は主にテスト問題の作成段階における「公平性」に対する取り組みを見ていきましょう。

ETSでは『公平なテスト開発とコミュニケーションのためのETSガイドライン』（ETS Guidelines for Developing Fair Tests and Communications；以下、『公平性ガイドライン』）を発行しており、テストを設計・開発する研究者のほか、彼らが作成した「設計仕様」に沿って問題・テストフォームの作成や、採点の監視を担当する専門スタッフが順守すべき共通のガイドラインとして用いられています。

この『公平性ガイドライン』では公平性の基本原則を提示した上で、「受験者の成功を妨げる障壁」「受験者集団に対する適切な用語の使用」「AIアルゴリズムの公平性」などを含む多様な観点から公平性を担保するための指針を示しています。

ここではテストの問題作成に焦点を当て、上記のうち「受験者の成功を妨げる障壁」について見ていきます。ここでいう「障壁」とは、テストが測ろうとしている受験者の能力などに関連性のない要素であるにもかかわらず、受験者のパフォーマンス発揮に影響を与えてしまう要素を指します。『公平性ガイドライン』ではこうした要素を以下の3つのカテゴリに分類し、それぞれについてガイドラインを示しています。

1. 知識・技能・能力
2. 感情
3. 身体

まず「1. 知識・技能・能力」については、テストが測定対象としない知識・技能・能力を求める問題の出題は回避すべ

きとしています。具体的には、例えばTOEIC Programのように「英語コミュニケーション能力」を測定対象とするテストに、数学や歴史や専門的なビジネスの知識などがないと解けない問題は出題しない、といったケースが該当します。

次に「2. 感情」については、受験者のネガティブな反応を引き出す可能性のあるトピック（例：差別、戦争など）は回避すべきとし、またその他配慮を要するトピック（例：集団間の差異、宗教、暴力、障がいなど）も列挙されています。

最後に「3. 身体」については、あらゆる受験者に可能な限り等しい受験体験を提供することを目指すための指針が示されています。例えば、テスト問題に複雑な視覚資料を用いるかどうかを検討する際には、障がいのある方のアクセシビリティに影響を与える可能性がある事実を考慮する、といったケースが挙げられます※。

これまで2回にわたり、ETSの「公平性」に対する取り組みをご紹介してきましたが、これらはほんの一部に過ぎません。ETSでは公平性の定義の「新化」を念頭に、『公平性ガイドライン』を“transitional one”と自ら位置付け、公平性にまつわる課題に対するソリューションを探究し、革新と適応を続けていく姿勢を示しています。

※ETSではテストの「実施」面においても、身体に障がいのある方に対して公平な受験体験を提供するために、ETSが規定する特別対応による受験環境（試験時間の延長、拡大版用紙や点字による受験など）をご用意するなどの措置を取っています

Reference

Educational Testing Service. (2022). *ETS Guidelines for Developing Fair Tests and Communications*.



あなたが世界をつなぐ
あなたと世界をつなぐ

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
The Institute for International Business Communication

IIBC 公式サイト <https://www.iibc-global.org>
外部からの寄稿や発言は、必ずしも当協会の見解を表明するものではありません。

本誌は公式サイトでもご覧いただけます。

https://www.iibc-global.org/iibc/activity/iibc_newsletter.html



IIBC NEWSLETTER



【お問い合わせ】

広報・CSR チーム pr@iibc-global.org